

国際図学会報告

国際担当副会長

堤 江美子 Emiko TSUTSUMI

はじめに

国際図学会 (ISGG: International Society for Geometry and Graphics) は、1988年、第3回国学国際会議ウイーン大会の折に鈴木賢次郎氏 (東京大学) によって提案され、1990年の第4回マイアミ大会での検討を経て、1992年、第5回メルボルン大会において正式に発足した。その詳細は図学研究30周年記念号『図学は今』の国際図学会報告を参照されたい。

この10年間は、その発足期の意志を受け継ぎながら、2年ごとに国際会議を開催するとともに、1997年からは H. Stachel 氏を編集長として国際学会誌 JGG (Journal for Geometry and Graphics) が年2号のペースで刊行されている。また、学会のホームページを徐々に充実させている。以下、この10年間の状況を報告する。

1997年

ISGG は一部理事の改選によって鈴木賢次郎会長、L. Goss (アメリカ) アメリカ地区副会長、V. O. Thomas (オーストラリア) アジア地区副会長、平野重雄事務局長が新たに選出され、H. Satchel (オーストリア) ヨーロッパ・アフリカ地区副会長とともに新体制に移行した。

1998年

第8回国学国際会議 (8th ICECGDG) が、米国テキサス大学 (実行委員長: D. Juricic 氏) をホスト校として開催された。この会議で ISGG ははじめて正式に主催団体として認められ、Japan Society for Graphics Science (JSGG) および Engineering Design Graphics Division (EGDG) of the American Society for Engineering Education (ASEE) が共催する形で行われた。また複数社の CAD 関連企業の協賛があった。会議には29カ国から約200人が参加し、発表総数は117件に及んだ。日本からは56名 (同伴者6名を含む) が参加した。招待講演の一つにおいて、アメリカの G. R. Bertline 氏が図的表現に関する専門領域として、空間認識とイメージング、幾何学を基礎とする “Visual Science” という考え方を示した。

同会議のフォーラムは “Taxonomy of Geometry and Graphics” と題され、幾何学 (Geometry) と図的表現 (Graphics) についてその意味内容と ISGG にとって関心がある分野は何かについて討論が持たれた。

2000年

第9回国学国際会議 (9th ICGG) が南アフリカ共和国ランドアフリカンス大学 (実行委員長: J. Praetorius 氏) をホスト校として開催された。会議には19カ国から92人が参加し、発表総数は88件であった。日本からは39名が参加した。第8回の会議での議論の結果、この回より、会議の名称は ICECGDG (International Conference on Engineering Computer Graphics and Descriptive Geometry) から ICGG (International Conference on Geometry and Graphics) に変更された。

同会議のフォーラムにおいては、Virtual Design によって図は不要になるのかという視点で議論が行われ、今後さらに議論を深めていくことになった。

なお、発表された研究領域が広範になったというのが会議参加者の感想であったが、この傾向は第6回あたりから見えていた。というのも、第6回は日本で初めて行われた図学国際会議であり、日本図学会の図に関わる研究の領域の広さも一役買ったのではないだろうか。

2001年

ISGG は一部理事の改選によって G. Weiss 会長、P. Zsombor-Murry (カナダ) アメリカ地区副会長、堤江美子アジア地区副会長、山口泰事務局長が新たに選出され、H. Satchel (オーストリア) ヨーロッパ・アフリカ地区副会長とともに新体制となった。

2002年

第10回国学国際会議がウクライナ共和国キエフ市にあるウクライナ国立工業大学キエフ科学技術専門学校 (実行委員長: V. Mykhailenko 氏) をホスト校として開催された。会議には24カ国から122人が参加し、発表総数は約100件であった。招待講演の一つとして、日本図学会会長の鈴木賢次郎氏により日本図学会における研究と教育の現状が紹介された。

また、新たにポスターセッションが取り入れられた。

2004年

第11回国学国際会議 (11th ICGG) が中国広州市の広東工業大学 (実行委員長: Z. Zuo 氏) をホスト校として開催された。会議には14カ国から112人が参加した。

本会議では、閉会式において H. Stachel 氏 (ウイーン工科大学) に “Steve Slaby Award 2004” が授与された。氏の受賞理由の中でも特に強調されるべきは、国際学会誌 JGG の編集長として同誌の質を維持してきたことである。本賞は、もともとは1991年にポルトガルの H. Santo 氏によって COMPUGRAPHICS '91 が開催された折に創設されたものであり、米国プリンストン大学名誉教授の S. Slaby 氏に因んで図学教育に対する国際級のリーダーシップと貢献を示した者に贈られてきた。1995年には G. Bertoline 氏が、1997年には A. Van Dam 氏が受賞した。ISGG は H. Santo 氏の意思を受けつぎ、図学国際会議 ICGG の場において本賞を授賞することを理事会で決定した。

2005年

ISGG は一部理事の改選によって堤江美子会長、G. Weiss (オーストリア) ヨーロッパ・アフリカ地区副会長、Z. Zuo アジア地区副会長が新たに選出され新体制となった。これに伴い、G. Weiss 氏によって管理されていた ISGG の Web サイトはその運営・管理が日本に移った。

2006年

第12回国学国際会議 (12th ICGG) がブラジルのサンパウロ大学 (実行委員長: E. T. Santos 氏) をホスト校として開催された。会議には18カ国から90人が参加し、予定された発表総数は約90件であったが、航空会社のトラブルにより参加者が減少したため発表件数は少なかった。

本会議では、閉会式において鈴木賢次郎氏 (東京大学) に “Steve Slaby Award 2006” が授与された。氏の受賞理由の中でも特に強調されるべきは、国際図学会 ISGG および国際学会誌 JGG の立ち上げと ISGG の組織運営全般に関わる貢献である。

招待講演の一つは、ブラジルの図学会を長年にわたりリードしてきた E. S. Lindgren 氏による4次元ユークリッド空間モデルの話であった。また、日本からは鈴木賢次郎氏が3D-CAD/CGを組み込んだグラフィックス・リテラシー教育の開発結果について報告した。

国際学会誌 JGG

国際学会誌 JGG は、Heldermann Verlag から出版されており、ISSN1433-8157が付与されている。ISGG の趣意書にもあるように、広義の図学に関して以下の3つの分野の論文を掲載している。

1. Theoretical research
2. Applications in industry and design
3. Education

詳細は図学研究第37巻2号「図学国際学会誌 (JGG: Journal for Geometry and Graphics) について」を参照されたい。

JGG は年間2号で平均20編の論文が採択されている。掲載論文は ICGG における座長推薦論文と ISGG 会員による自由投稿 (共に査読つき) からなる。投稿に関する情報は以下のページを参照されたい。

<http://www.heldermann.de/JGG/jgginfo.htm>

また、アブストラクトは以下のページから見るができるほか、5年以上前の論文は FullText を pdf 形式でダウンロードできる。

<http://www.heldermann.de/JGG/jggcon.htm>

ISGG のホームページ

ホームページは、現在、ISGG より依頼されて斉藤孝明氏が管理している。URL は以下のとおりである。

URL : <http://www.isgg.net>

入会申し込みもホームページから行うことができる。

さいごに

国際図学会は今年で15歳になる。国際図学会では、“Geometry and Graphics” を広義の図学としてその名称に用いているが、近年、ヨーロッパのいくつかの国では、ISGG の会員が組織するローカルな学会の開催する会議の名称にこの Geometry and Graphics を用いたり、ENGINEERING GRAPHICS AND DESIGN に関する会議の説明の中で、“Geometry and Graphics の分野” と表現したりしている。招待されたある学会では、たとえば欧州高等教育圏の構想における教育体制の整備が問題になっていた。国際図学会では、このような問題解決のためにも各国の図学会の組織化と連携が今後の一つの課題であろう。日本の図学関係者の方々にも積極的な協力をお願いしたい。

つつみ えみこ 大妻女子大学